１　評価問題

「少年の日の思い出」と「あと少し、もう少し」について、観点を決めて比較読みし、物語の魅力とは何かあなたの考えを述べなさい。

　次のア・イの指示にしたがって書きなさい。

　なお、観点は、「場面の展開／構造」・「伏線」・「登場人物の関係」・「描写（心理描写・行動描写・情景描写）」・「視点」の中から選ぶこと。

ア　一段落目に「少年の日の思い出」と「あと少し、もう少し」の文章から、自分が着目した箇所を引用し、そこで用いられている表現とその効果について書くこと。

イ　二段落目にアと関連させた上で、物語の魅力とは何か、あなたの考えを具体的に書くこと。

２　解答類型

(1) 正答の条件

次の条件を満たして解答している。

⓪　観点を「場面の展開／構造」・「伏線」・「登場人物の関係」・「描写（心理描写・行動描

写・情景描写）」・「視点」の中から選んでいる。

①　自分が着目した箇所を引用している。

②　引用した箇所に用いられている表現とその効果について書いている。

③　「少年の日の思い出」と「あと少し、もう少し」について、比較した内容と関連させ、物語

　の魅力について自分の考えを書いている。

(2) 正答例

①〈場面の展開／構造〉

　 私は、「場面の展開／構造」という観点で、回想場面の有無による違いについて比較した。「少年の日の思い出」は最初に現在の場面が描かれ、大人になった僕が「次のように語った。」と、少年時代の思い出について回想する場面が描かれている。詳細な回想は、大人になった今でも忘れることができないということをより深く伝える効果がある。一方、「あと少し、もう少し」は「スタート一分前。」、「九時前になって」、「しんとした競技場に、ピストルの音が響く。」とあるように、現在のシーンのみが描写されている。そのため、登場人物と同様に時間が流れ、読者にも臨場感が伝わる効果がある。

　 構造の工夫により、読み手に対して、効果的に場面を印象付けたり、先の展開への手がかりを想像したりできると考えた。よって、私たち読み手は、謎解きのように作者の意図を探りながら読み進めることで、物語をより深く読むことができる。これが、物語の魅力だと考えた。

②〈伏線〉

　 私は、「伏線」という視点で比較した。「少年の日の思い出」では、思い出が語られる前の場面で「昼間の明るさは消えうせようとしていた。」、「たちまち外の景色は闇にしずんでしまい、窓全体が不透明な青い夜の色に閉ざされてしまった。」など、暗い景色が描かれている。これには、これから語られる思い出が明るい話ではないことを予感させる効果がある。また、「あと少し、もう少し」では、「僕はがんばってと言ってもらえることが、幸せなことだと知っている。」とあり、「僕」が応援を受け止めている様子が描かれている。これには、今後の物語の展開で幸せにつながる経験が語られることを予感させる効果がある。

　 このように、物語の魅力は、自分の予想が的中していると「やっぱり！」と自分の読みが正しかったことを（実感したり）証明できたり、物語を読み終わった後で、実はあの場面の、あの言葉は伏線だったのか、と考察しながら、再び内容を読み味わうことができることだと考える。

③〈登場人物の関係〉※設定、人物像

　 私は、「登場人物の関係」という観点で比較した。「少年の日の思い出」では、「非の打ちどころがないという悪徳をもっていた。」とあるように、「僕」にとって「エーミール」は到底敵わない相手であるとともに、否定的な感情を抱いていることが分かる。また、「僕」は相手の良さを素直に認められないという人物像も読み取ることができる。このことから、読み手は登場人物の心情や人物像を理解しながら読み進められるという効果がある。

　　一方、「あと少し、もう少し」では、緊張し、気後れしそうになる「僕」に「上原先生」が「設楽君、がんばって。」と声をかける。その言葉は「願いをたくすかのように言った。具体的じゃないいつもどおりの言葉。」であると書かれている。ここから、「上原先生」はこれまでも「僕」に同じような言葉をかけており、最後は「僕」に任せていることが分かる。また、その後「だけど、僕はがんばってと言ってもらうことが、幸せなことだと知っている。」と書かれていることから、「僕」は、これまでにもがんばってと言われることが、いかに幸せなことか経験していることを推測して読むことができる。つまり、読み手は登場人物の関係性に基づいたセリフから、明確に記述されていない過去の出来事を推察できるという効果があると考えた。

　　このように物語の魅力は、登場人物の関係に基づいた言動等に注目しながら読むことで、登場人物の心情や人物像、これまでにどのような経験をしてきたかなどをより深く理解できることにあると考えた。

④〈描写（心理描写・行動描写・情景描写）〉

　 私は、「行動描写」という観点で比較した。「少年の日の思い出」では、「休暇になると、パンを一切れ胴乱に入れて、朝早くから夜まで、食事になんか帰らないで、駆け歩くことがたびたびあった。」とあり、一日中チョウ集めをしている様子が描かれている。この行動によって「僕」が、チョウ集めに、膨大な時間と純粋な熱情をつぎこんだことが分かる。「あと少し、もう少し」では「やっぱり僕とは違うんだ。そう気後れしそうになって、小さく深呼吸をした。」とあり、一区を走る前の様子が描かれていて、僕が小さく深呼吸することによって、その場の空気感や自分をなんとか落ち着かせようとしていることが読み取れる。これらのことから、行動描写は、登場人物の心情や人物像等を読み手に委ねて伝える効果があると考える。

　 したがって、物語の魅力は、直接心情を表す言葉がなくても、読み手自身が登場人物の心情等を多様に想像できることだと考えた。

⑤〈視点〉

　 私は「視点」という観点で比較した。「少年の日の思い出」は、「僕」の視点で書かれている回想部分には、「僕は全くこの遊戯のとりこになり、ひどく心を打ち込んでしまい、」から、「僕」が非常に熱心にちょう集めに取り組んでいた時の心情等が直接的に伝わってくる。一方「あと少し、もう少し」は「設楽」の視点で描かれている。「寒さのせいかうっすら鳥肌が立つ」や「僕は体にはずみをつけて飛び出した。中学最後の駅伝が始まったのだ。」など、「設楽」の不安や頑張ろうとする気持ちが、読み手にダイレクトに伝わってくる描き方となっている。つまり、一人称視点で描かれていることで、読み手は語り手と一体感を感じながら物語を読むことができる。

　　このように物語の魅力は、描かれる視点によっては、読み手と語り手の距離を近付け、直接的に登場人物の心情等を読み取ることができるところにあると考えた。